



環境再生保全機構

地球環境基金便り

Japan Fund for Global Environment Report



特集

生物多様性は、今



THE PRESENT OF BIODIVERSITY

- 2 巻頭インタビュー：イルカさん
- 4 特集：生物多様性は、今
- 6 特集：NGO・NPOの活動事例から
- 10 Field Voice：晴れの国野生生物研究会
- 12 サポーターインタビュー：株式会社フレーベル館
- 15 第6回全国ユース環境活動発表大会全国大会 開催報告

「第7回全国ユース環境活動発表大会」開催決定！

今年度も「全国ユース環境活動発表大会(地方大会・全国大会)」を開催します。次世代を担う高校生などユース世代が日頃から取り組んでいる環境活動について発表し、それに対して表彰を行うこの大会は、自主的な環境活動の発展とユース世代のネットワーク拡大を目指しています。

大会の詳細については、2021年9月発行予定の情報誌「全国ユース環境ネットワークVol.13」や「全国ユース環境ネットワーク」のホームページなどでご確認ください。

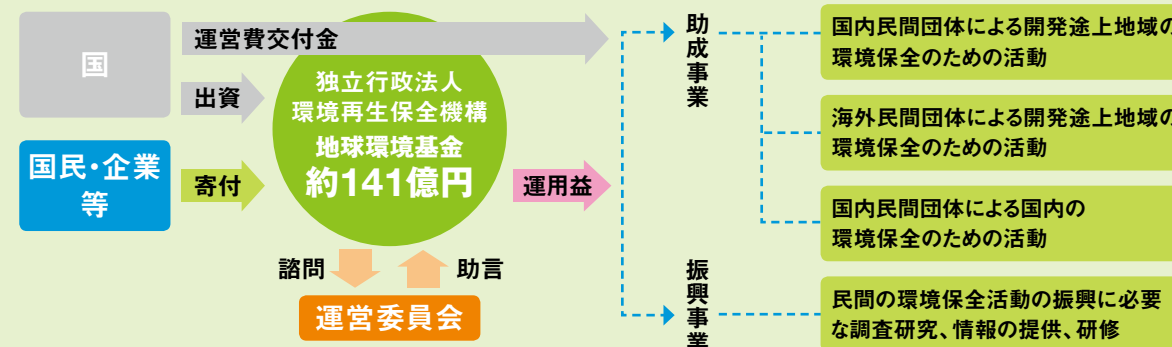
※感染症対策を十分に行ったうえで実施します。
開催時期における感染状況によっては、開催形式が変更になる場合があります。



第5回発表大会での交流の様子



環境再生保全機構は、国の出資金と民間からの寄付金により「地球環境基金」を設け、その運用益と国からの運営費交付金により、国内外の民間団体(NGO・NPO)が行う環境保全活動へ支援を行っています。



寄付メニューのご案内

スマートフォン決済アプリ「J-Coin Pay」からご寄付いただけるようになりました。



J-Coin Payサービスを利用されている方は、お持ちのスマートフォンから簡単に「ぽちっと募金」にてご寄付いただけます。J-Coin Pay「ぽちっと募金」の詳細は、こちらをご覧ください。



公式SNSで情報発信中！

FOLLOW US!!

Twitter @ERCA_kikin

イベント情報のほか、ききんちゃんのつぶやきも!!

Instagram @erca_kikin

ユース事業や助成団体の活動を紹介!!



表紙写真



上段左:サバンナシマウマ、上段右:ブルーヘッドツリーアガマ(写真提供:ワイルドライフ・プロミシング/撮影:山根裕美)
上段中央:カンムリシロムク(写真提供:IINET/撮影:インドネシア 西部バリ国立公園 森林生態系管理官 スギアルト)
下段:喜界島のサンゴ礁(写真提供:喜界島サンゴ礁科学研究所 ©Kaito Fukuda)

編集後記

毎日忙しく生活していると自然や生き物に思いを巡らせることは少ないかもしれませんが、この地球環境基金便りが「自分ごと」として考えてみるきっかけになればうれしく思います。立ち止まって、身近な自然を感じてみる。人、自然、生き物...それぞれの豊かな個性やつながりを大切に思う。わたしたちにもできることはたくさんあります。

地球環境基金便り

第51号 2021年(令和3年)9月号

発行/独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金部基金管理課
URL:https://www.erca.go.jp/jfge/ E-mail:c-kikin@erca.go.jp
〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町1310番 ミューザ川崎セントラルタワー8F
TEL:044(520)9606 FAX:044(520)2192 編集協力/株式会社東京法規出版



独立行政法人 環境再生保全機構





日本全国の多くの環境活動が未来を明るくしてくれると期待

ほかに環境省中央環境審議会自然環境部会の専門委員や国連生物多様性の10年日本委員会委員などもやらせていただいています。その多くが大学教授など専門家の

る活動をしていきたい。そう考えたとき、やはり私はシンガーとして、歌を通じてIUCNや環境問題について伝えたいと思い、環境保全をテーマにしたコンサート「イルカwith Friends」を企画。05年に第一回を開催して以来、毎年恒例となり、15回を数えるまでになりました。昨年、今年は開催できませんでした。昨年、今年開催してほしいという声をたくさんいただいているので、来年以降、何らかの形で続けていきたいですね。

集まりですが、そんな場でも私はシンガーであり、主婦であり母であることを大切にしています。その目線こそが、私が参加する意味だと思っています。専門家の方々が研究やデータを基に発言されるところに、私が日常生活からの視点で話すことで、少しでもお役に立てればと使命感に燃えています。こうした活動をしていると、環境NGO・NPOの方々を知り合う機会も多いですね。彼らと話しているのも感じるのは、みなさん驚くほど熱心だということ！熱意の塊のような人たちがばかりで、頭が下がる思いです。日本自然保護協会が主催する日本自然保護大賞の審査員もやっていますが、ここに応募されてくる環境保全活動もまた、どれも素晴らしいものばかりです。地道な活動を何十年も続ける方、工夫して楽しみながら活動するお子さんなど、環境保全のためにこんながんばっている人たちが日本全国にいると思うとうれしくなってきました。こうした一つひとつの地道な活動が、きっと地球をよい方向に導いてくれると期待しています。

地道な環境保全活動の一つひとつが地球の未来を明るくしてくれる

読者プレゼント



アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で3名様にイルカさんのサイン色紙をプレゼント。巻末はかき、またはWebより応募ください。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

イルカ

1950年東京都生まれ。女子美術大学に在学中にフォークグループを結成、74年ソロデビュー。75年「なごり雪」が大ヒットし、シンガーとしての地位を確立する。80年には女性シンガーソングライター初の「日本武道館」公演を成功させ、50周年を迎えた現在も毎年全国ツアーを続けている。絵本やエッセーなど書籍も出版し、自身の作品や活動を通じて「私達は皆、この地球という大きな生き物に住む、細胞同志である」というメッセージを伝え続けている。



2014年、山梨県富士河口湖町で開催された「イルカwith Friends」の様子。「この気持ちのいい空間を共有したい」と毎年訪れるお客さんが多いという。また同コンサートには毎年多くの環境NGO・NPOがボランティアで参加している



着物作家としても活動するイルカさん。生物多様性やレッドリストをテーマにした手描きの着物で、毎回、世界自然保護会議のステージに立っている。「日本の伝統的なモノづくりのほとんどは後継者不足で、レッドリストに掲載される野生動物のように絶滅の危機にあります。伝統的な文化の源は、美しい自然や生き物。だからこそ私は、環境保全と伝統的なモノづくりをつなげたいんです」

イルカさん

Iruka

「なごり雪」「まあるいいのち」など世代を超えて愛される名曲を数多く歌い、今年、デビュー50周年を迎えたイルカさんは、IUCN(国際自然保護連合)親善大使を務めるなど、数々の環境活動にも取り組まれています。

シンガーとして多くの人に自然や生き物の大切さについてメッセージを送り続けるイルカさんに、その活動の原点や取り組みへの思いを聞くとともに、環境保全に取り組む人たちへエールをいただきました。



肩ひじはらず、私らしく、地球環境のためにできることを続けていく

実は私、子どものころはアフリカで野生動物を救う仕事をしたいと思っていました。それがなぜシンガーソングライターになったのか自分でも不思議ですが(笑)、生き物も自然も大好きな子どもでしたね。

日本では60年代後半ごろから「公害」が問題になり、私ももちろん知識としては知っていました。ただそれを自分の問題として意識し始めたのは、結婚して主婦になってからです。主婦として一家の台所を任されたとき、そして近い将来、子どもを産み育てたいと思ったとき、環境問題が本当に自分の身近なものだと気づいたんです。この食べ物安全なの？汚れがよく落ちる強力な洗剤は便利だけれど、排水はどこへ流れているの？って。だから私は、今でもよく「お台所から地球が見える」「家庭の台所を預かる人は地球の源を握っている」と言います。子どもたちの未来を明るくするために、私たちは大人がちゃんと考えて暮らすことが大切です。そのために私は「丁寧な暮らし」を提唱し、実践しています。

IUCN親善大使として歌を通して環境の大切さを伝える

プロとして歌を歌うようになってからも、私のなかにはずっと生き物や自然への愛や地球環境への問題意識がありました。歌はもちろん絵本やエッセーなどでもその思いを込めた作品を発表していたところ、2004年に外務省からIUCN親善大使のお話をいただきました。野生動物を救う仕事には就けなかったけれど、別の形で地球環境に貢献できるなら、とお引き受けしたんですが、就任記者会見後にびっくり。IUCN日本委員会にはオフィスがなく、スタッフもたった一人でした。資料も英語版しかなかったの、IUCNを知ってもらうために、まず日本語版のパンフレットを作るところから始めました。

そんなゼロからのスタートでしたが、だからこそ私のやりたいように、私のスタイルでやれると思います。俄然やる気が出ました。「環境活動」というと難しく感じる人もいるかもしれませんが、肩ひじはらずに、みんなに親しんでもらえ

自然だけを切り離して考えるのではなく、 気候変動、防災、健康など さまざまな課題と結び付けた 総合的なアプローチが大切になる

関係の行政や農業に携わる生産者、市民団体、その地域に暮らす人など、あらゆる分野の人の参加が求められます。

この10年で前進できたこと

昨年「国連生物多様性の10年」は節目を迎え、愛知目標の達成度が評価されました。国連の条約事務局が公表した「地球規模生物多様性概況第5版（GBOS）」では、愛知目標20の項目のうち、完全に達成されたのはゼロでしたが、20の項目を細分化した60の要素ではいくつか達成されたものもあるという評価でした。

具体的には、保護区の指定や国家戦略の作成といったアクションは計画通り進んだ一方、農業や林業の持続性、サンゴの健全性などの状況は良くなっています。アクションはしたものの、状況の改善に至らなかったという傾向が顕著で、生物多様性の損失要因となっている経済や社会の仕組みを根本的に変革する必要があるとGBOSの

レポートは強調しています。

私もまた、アクションの部分ではこの10年になんり進展があったと感じています。COP10をきっかけに、IUCN-J（国際自然保護連合日本委員会）が立ち上げた「にじゅうまるプロジェクト」という企画があります。市民団体や企業などが愛知目標達成に向けてどんな活動をするか宣言してもらう企画で、10年で756の団体から1085の宣言が集まりました。これは当初の予想を大きく上回る数です。ここから新しい連携も生まれました。例えば同プロジェクトでの交流をきっかけに始まった「田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト」には、NGOを中心に米の生産者や流通業者、地域の企業などが参加。まさに愛知目標が求める「あらゆるセクターの人が参加する」活動です。まだまだ達成できていないこともありますが、前進したこともたくさんあります。

「OuCUM (Other Area based Effective Conservation Measures) = 保護区以外の保全手段」です。法律で保護区を指定して自然を守る「保護地域 (Protected Area)」に対してOECMは地域の人たちが保全活動をするエリアであり、民間が主体となって管理し

これからの活動は民間の力がカギに

では今後はどんな活動が求められているのでしょうか。一つは生物多様性と温暖化対策を両立した取り組みです。例えば「カーボンニュートラル」の実現には再生可能エネルギーが欠かせません。しかし自然に配慮せず山を切り開いて風力発電やメガソーラーを設置すれば、生態系が破壊されます。どちらかだけの視点ではなく、生物多様性も温暖化対策も両立するアプローチが大切です。また近年、集中豪雨による被害が増え、それに対応した防災・減災対策が急務になっていますが、それもまたやり方によっては自然を損ないます。そこで最近では、ダムや堤防など人工的な「グレイインフラ」だけに頼るのではなく、自然の地形や植生を生かして防災・減災の機能を高める「グリーンインフラ」を重視する動きが少しずつ出てきています。

もう一つ私が注目しているのが



一般財団法人
自然環境研究センター
上級研究員
IUCN-J（国際自然保護連合
日本委員会）会長
渡辺 綱男さん
(わたなべ・つなお)

1956年東京生まれ。1978年環境庁に入庁、全国の国立公園や野生生物の保護管理にあたる。釧路湿原の自然再生や知床の世界遺産登録、生物多様性条約COP10の開催、三陸復興国立公園づくりなどに携わり、2012年環境省を退官。現在は自然環境研究センターや国連大学に勤務。著書に『日本の自然環境政策』（東京大学出版会）など。

ます。OECMのように民間の力で保全する地域と保護地域が相まって国土全体の自然の質を高めていくのが今後の大きな流れになるでしょう。

これからの生物多様性への取り組みは、自然だけを切り離して考えるのではなく、気候変動や防災・減災、健康、福祉、文化、農林漁業など地域のさまざまな課題と生物多様性を結び付けた総合的なアプローチが大事です。そこでカギを握るのは、民間の力です。NGO・NPOはもちろん、地域の人たちの理解や幅広い世代の参加も大切です。それぞれが自分の持ち味を生かし、一人ひとりが主役になったやわらかく幅広いパートナーシップを育てていくことが、今、求められています。

特集

生物多様性は、今



THE PRESENT OF BIODIVERSITY

「生物多様性」という言葉が生まれたのは1985年。その背景には、世界各地で急激に進み始めた自然破壊に対する危機感がありました。92年には「生物の多様性に関する条約（生物多様性条約）」が採択され国際的な生物多様性保全の枠組みはできたものの、今なお人間は自然環境を改変し、多くの生き物を絶滅の危機に追い込んでいます。

2011～2020年の「国連生物多様性の10年」が節目を迎えた今、世界の、日本の生物多様性はどのような状況にあるのか。そしてこれから必要とされる取り組みとは。自然環境研究センター上級研究員の渡辺綱男先生にお話をうかがいました。

（表1）生物多様性とは？～3つの多様性～

生態系の多様性	森林、里地里山、河川、湿原、干潟、サンゴ礁など、いろいろなタイプの自然がある
種（種間）の多様性	動植物から細菌などの微生物にいたるまで、いろいろな生き物がいる
種内（遺伝）の多様性	同じ種でも環境に適応し異なる遺伝子を持つことで、形や模様、生態などに多様な個性がある

生物多様性とは、生き物たちの豊かな個性とつながりのこと。地域に固有の自然があり、それぞれに特有の生き物がいて、それぞれがつながっている

（表2）愛知目標（20の個別目標） 環境省 生物多様性HPより

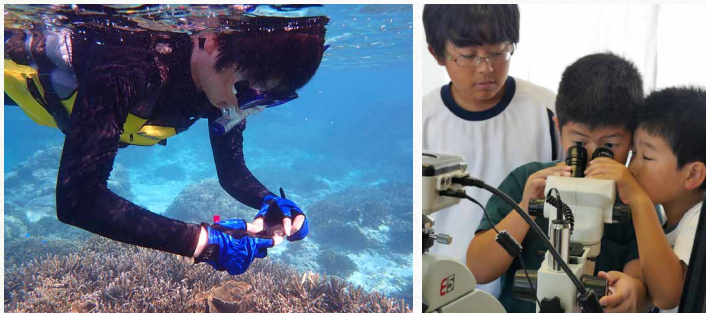
目標1	人々が生物多様性の価値と行動を認識する
目標2	生物多様性の価値が国と地方の計画などに統合され、適切な場合に国家勘定、報告制度に組み込まれる
目標3	生物多様性に有害な補助金を含む奨励措置が廃止、又は改革され、正の奨励措置が策定・適用される
目標4	すべての関係者が持続可能な生産・消費のための計画を実施する
目標5	森林を含む自然生息地の損失が少なくとも半減、可能な場合にはゼロに近づき、劣化・分断が顕著に減少する
目標6	水産資源が持続的に漁獲される
目標7	農業・養殖業・林業が持続可能に管理される
目標8	汚染が有害でない水準まで抑えられる
目標9	侵略的外来種が制御され、根絶される
目標10	サンゴ礁等気候変動や海洋酸性化に影響を受ける脆弱な生態系への悪影響を最小化する
目標11	陸域の17%、海域の10%が保護地域等により保全される
目標12	絶滅危惧種の絶滅・減少が防止される
目標13	作物・家畜の遺伝子の多様性が維持され、損失が最小化される
目標14	自然の恵みが提供され、回復・保全される
目標15	劣化した生態系の少なくとも15%以上の回復を通じ気候変動の緩和と適応に貢献する
目標16	ABS※に関する名古屋議定書が施行、運用される
目標17	締約国が効果的で参加型の国家戦略を策定し、実施する
目標18	伝統的知識が尊重され、主流化される
目標19	生物多様性に関連する知識・科学技術が改善される
目標20	戦略計画の効果的な実施のための資金資源が現在のレベルから顕著に増加する

※遺伝資源へのアクセスとその利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分

「生物多様性条約」では、生物多様性には3つの多様性があり（表1）、あらゆるレベルの多様性を大切にすることが重要だと記されています。なぜ大切にしなければならぬのでしょうか。私たち人間は、自然や生き物とながら、いろいろな「恵み」を受けています。自然や生き物は気候を整え、水を涵養して人間の生活の基盤をつくってくれます。食べ物や薬の材料を提供し、災害も防いでくれます。また音楽や絵画など文化の根源にも自然や生き物があります。こうした数多くの恵みを受ける一方で、人間は、自然や生き物とのつながりをたやすく壊してしまっています。「生物多様性を大切にする」ということは、そのつながりを尊重し、人と自然のバランスを取り戻していくことだと思っています。

人と自然の共生を目指す愛知目標

2010年に愛知県で開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）では、生物多様性を守るための愛知目標（表2）が採択され、2011～2020年を「国連生物多様性の10年」と定めて動き出しました。愛知目標を通じて描くビジョンは、2050年までに人と自然が共生する社会を実現することです。山奥や離島の貴重な自然はもちろんですが、それだけではなく、もっと身近な都市や町、村の自然、農業や林業、漁業など人の暮らしがある地域と自然の関係をより良いものになりたい。そのためには、あらゆるセクターの人の参加が欠かせません。人が生活を営む地域の生物多様性の質を上げるためには、農業・経済



最近には海に関心が薄い子どもが増えている傾向にあるが、学校での海洋学習を通じて海と触れ合うことで、親しみや誇りを持てるようになっていくという



研究所には「サンゴミュージアム」と「サンゴカフェ」を併設。不定期に学習会「サイエンスカフェ」を開催し、リーフチェックなどの調査の結果を公開している(上)。また町の広報誌『広報きかい』では毎月1ページを研究所のページとして使わせてもらい、研究所の活動を広く島民に知らせている(右)



のサンゴの被覆度が非常に高いと定量的に示せるようになったことは大きな成果です。

また大雨で海に流れ込んだ土砂によって表面が覆われるとサンゴは死んで減少してしまいますが、その後回復が見込めることもわかってきました。調査を継続すれば、一度減ったサンゴがどのくらいの時間で回復するかも見えてくると思われる、今後のサンゴ礁の保全に役立つことが期待されます。

サンゴは近い将来、気候変動によって絶滅する恐れがあると言われており、

私たちも水温の変化がサンゴにどう影響するかを注意深くモニタリングしています。サンゴは多様性に富み、生態系としての耐性があります。どうすればサンゴ礁を維持できるのか、今はさまざまな調査記録を丹念にとりつつ、土砂が流れ込む地形や地下水流入個所の調整といった情報を蓄積していきたいと考えています。

学校教育との連携で子どもが島に誇りをもてるように

研究所では島の未来をつくる子ども

これまでの活動で、喜界島では行政も住民もサンゴ礁保全への関心が高まっていると実感しています。奄美群島各島の行政機関や学校からも「喜界島をモデルとした環境保全活動を実施したい」という声が多く寄せられるようになりました。また奄美大島と徳之島がこの7月に世界自然遺産に登録さ

喜界島のサンゴ礁保全活動を奄美群島全体に広げていく

たちへの教育も重視し、島内の複数の学校で海洋学習の機会を設けています。研究所から最も近い小学校では、5年生が一年を通じてサンゴについて学びます。座学だけでなく宿泊学習の機会を利用して実際に海に入ってサンゴを撮影。自分たちでサンゴの種類や生態について調べて発表します。中学校では生徒が自らサンゴ養殖の苗をつくり、海に沈めて成長を観察。サンゴが成長する時間を体感し、自分たちの島がどのくらいの時間をかけてできたかを想像してもらいます。学校での活動はすでに5年以上継続し、島にはサンゴに詳しい子どもがどんどん増えています。喜界島の子どもの多くは、いずれ島外に出ます。そのとき自分の島を誇りに思えるようになってほしいと思います。

将来、奄美群島の島々が、サンゴ礁をはじめとした自然と人間が共生していくための情報を世界に発信できる場所になり、自然との共生を目指す人たちが学びに集まる場所になってほしいと願っています。



特定非営利活動法人

喜界島サンゴ礁科学研究所

鹿児島県大島郡喜界町 <https://kikaireefs.org/>

活動名

奄美群島における環境サステナビリティを目指したサンゴ礁保全と教育、地域システムの循環形成



所長 山崎敦子さん

喜界島で培った地域主体のサンゴ礁保全活動で奄美群島全体を自然と人間の共生先進地に

サンゴ礁は沿岸生態系の生物多様性を維持する重要なプラットフォームです。海には約50万種を超える生き物があり、実はその4分の1はサンゴ礁に生息していると言われています。サンゴにはいろいろな形があり、その形によって棲める生き物の種類や大きさが変わります。サンゴの種類が増えれば、生き物の棲みかのバリエーションが増え、その海域の生き物の種類の増加につながります。サンゴの石灰質の骨格が長い時間をかけて積み重なり、サンゴ礁が形成されると、深い外海や白波が碎ける砕波帯、内側の波の穏やかな海域（ラグーン）などの地形ができ、それぞれに適応した多様な生き物が生息できるようになります。またサンゴは自分の体内に藻類を共生させて光合成したり、そのエサとなる排出物を出したりもします。熱帯・亜熱帯域の海は貧栄養で生き物にとって過酷な環境ですが、サンゴが体内で栄養を循環させることで他の生き物の命をつないでいるのです。

喜界島サンゴ礁科学研究所は、そんな海の生物多様性の要であるサンゴの



隆起サンゴでできた喜界島では、島で採れる石は全てサンゴの化石。生活の道具や家の石垣などもサンゴでつくられてきた。研究所ではそれを「サンゴ礁文化」と呼び、海洋学習にも取り入れている

研究に特化した研究所です。南北に長い日本列島には、多様性に富んだサンゴが分布しています。なかでも喜界島は熱帯域と温帯域の真ん中に位置するため、熱帯性と温帯性のサンゴを観察できます。また喜界島は隆起サンゴ礁から成り立つ島であり、喜界島の地質を調査することで太古の昔から現在までの地球環境変動の記録が見えてきます。国際的にも希少な環境であるこの喜界島を拠点に、私たちは2014年から海洋・地質およびそれに係る生物に関する調査・研究事業をスタートしました。

島民・一般ダイバーが参加して定期的なリーフチェックを実施

当団体は2018年から喜界島で地域主体型のサンゴ礁保全プラットフォーム構築のための活動をしてい

ます。その活動の基礎となるのが「リーフチェック」です。国際的に統一された手法を用い、水深5メートルと10メートルで、一定の範囲を覆うサンゴの割合や魚の種類などを調査。研究所のスタッフだけでなく、ダイビングができる地域住民や島外から来たダイバーも参加できるため、今では毎年恒例のアクティビティにもなっています。

リーフチェックから見えてきたのは、まず喜界島のサンゴの被覆度（海底をサンゴが覆っている割合）が40%を超えていることです。この数値は世界的にもとても高いものです。以前は海がどのような状態にあるかは「記憶」だけで「記録」されていませんでしたが、リーフチェックにより記憶が数値となり、他のサンゴ生息域と比べて喜界島



喜界島沿岸のサンゴ礁。サンゴは世界中に800種類以上存在すると言われていたが、喜界島サンゴ礁科学研究所では、これまでの調査で130種以上を確認している（©Kaito Fukuda）

NGO・NPOの活動事例から

助成団体の中から、生物多様性の保全活動に取り組む3団体を紹介します。地域に溶け込み、地域の文化を尊重し、住民とともに自然や生き物との共生を目指して活動しています。

YouTube ERCA 公式チャンネルで団体の活動動画を公開中！





IINET (イーイーネット)

インドネシア

活動名

インドネシア・西部バリ国立公園周辺村における、
地域に根ざした環境教育と若者ファシリテーター育成を通じた
『子どもたちが生きいきと活動するカンムリシロムク保護村』づくり



代表
Elizabeth
Rahyu
Prihatiniさん

カンムリシロムク保全活動を通じて 広く陸や海の生物多様性保全の意識を形成



カンムリシロムクのつがい
(撮影：スギアルト)

インドネシア・バリ島の西部バリ国立公園（以下、公園）には、マングローブ林、熱帯モンスーン林、熱帯雨林、熱帯サバンナ林などの多様な生態系があります。そこに生息するムクドリ的一种「カンムリシロムク」はバリ島の固有種で、昔は公園周辺の村の空を覆うほど飛び交っていました。ところが近年、森林の減少や密猟が原因で個体数が激減。今ではIUCNのレッドリストで絶滅危惧種に指定されています。こうした状況のもと、日本のNGO「一般社団法人あいあいネット」は、2008年から現地の人々と自然が共生する地域づくりを支援し、住民主体の活動が生まれてきました。その後、現地のコーディネーターや専門家、公園事務所関係者らが民間のボランティア団体「IINET」を設立。2020年からカンムリシロムク保護村づくりの活動をスタートさせました。

環境ファシリテーターと一緒に子どもがモニタリング活動

活動の主役は子どもです。子どもたち

ちにとって身近な家や学校の環境保全から始め、いずれ自分たちの村まで活動範囲を広げられるようになることが重要だと私たちは考えています。そこで企画したのが、環境ファシリテーターが公園周辺の村の小学校で実施する環境学習です。

環境ファシリテーターは村の若者から育成します。まず公園職員が村を訪問し、村人と親交を深めつつ環境保全に興味をもった若者に研修を実施。環境ファシリテーターとなった村人が村の子どもにも環境教育を実施するという、まさに地域に根差した活動です。

残念ながらコロナ禍で学校を直接訪れる計画は延期になっていますが、これまでに育成した環境ファシリテーターは村のゴミ管理や家畜の糞から堆肥をつくる住民グループとの活動など現場で活躍しています。

今、村の子どもたちは環境ファシリテーターに見守られながら、カンムリシロムクのモニタリングに取り組んでいます。群れの個体数や幼鳥の数、村内での行動を記録し、定期的に公園職員に報告しています。モニタリングにより、子どもたちは自然に村のカンムリシロムクがどこでどんな行動をしているのか分かるようになってきました。ゆくゆくはこの子どもたちが、村

の環境保全の取り組みの主体になっていくことを期待しています。

より多くの村人を巻き込んで活動を拡大させていきたい

カンムリシロムク保全の取り組みは、間接的に村人の環境問題や生物多様性に対する意識を培うものです。「カンムリシロムクが以前と同じように集落で飛び交えるような環境を整備したい」という村人の思いは、マングローブ林やサンゴ礁、多様な動物たちなど広く陸や海の生物多様性保全への意識の形成につながっています。最近では、違法伐採や密猟など環境破壊につながる行動を目撃したとき、積極的に関係当局に連絡する村人も現れ始めました。今後より多くの村人を巻き込んで活動を拡大させ、いずれはエコツーリズムなどで村の観光振興にも直接貢献できるようにしていきたいです。



マスターファシリテーター（公園職員）からカンムリシロムクの生態を学ぶ子どもたち



特定非営利活動法人 ワイルドライフ・プロミシング

北海道札幌市

<http://www.wildlife-promising.org/>

活動名

ケニア、マサイマラ国立保護区周辺
ゴイラレ地域の野生動物保全活動



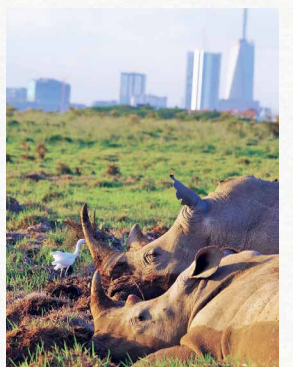
研究員
山根裕美さん

地域の人々に寄り添った活動で 人・家畜と野生動物との共生を目指す

ケニア共和国ナロック県ゴイラレ地域は、世界的に有名なマサイマラ国立保護区に隣接。多くの野生動物が生息する生物多様性に富んだ地域であると同時に、はるか昔からマサイの人々が牧畜を生業として暮らしてきた地域でもあります。ところが近年、この地域で人と野生動物の軋轢が深刻化しています。ゴイラレの街が大きくなり人口が増加するとともに、野生動物の生息域が減少。家畜と野生動物の生息域が重なり、家畜が野生動物に襲われたり、逆に家畜に野生動物の貴重な水場が奪われたりなどの問題が起きています。私たちはこうした問題を緩和し、人・家畜と野生動物との持続的な共存を目指してケニアで活動しています。

水場と放牧ルートの管理で生息域をゾーニングする

当団体がまず取り組んだのは、地域のマサイの人々の居住域と野生動物の生息域を区分（ゾーニング）することです。GPSを使って野生動物にとって重要な水場や草場などの位置を把握。水場に集まる野生動物と家畜の数をカウントし、マサイの人々とともに資源マップを作製して配布しました。これにより、家畜の放牧では野生動物が使用する頻度が高い水場を避ける傾



野生のシロサイとナイロビのビル群。水場や草場の近くまで開発が進み、野生動物の生息域が脅かされている

向が生まれ、ある水場では家畜の使用頻度が約20%減少。特に夜間の利用はほぼなくなりました。しかし水場の数は限られているうえに、野生動物が利用する水場は家畜にとっても都合がよい場所にあるため、水場のゾーニングには限界もあります。そこで現在は、家畜の移動ルートのゾーニングも始めています。家畜を自由に放牧すると、野生動物が家畜を避けて地域からいなくなってしまうため、家畜の移動ルートを制限することで野生動物の生息域を残す試みです。

マサイの生活や文化を尊重し共に考えて活動を継続

同時にマサイの人々への野生動物保全の啓発活動にも力を入れています。野生動物管理を担う政府機関、ケニア野生生物公社の元レンジャーに講師になってもらい、野生動物保全のワークショップを複数回開催。少しずつ野生動物との共生への意識が前向きに変化

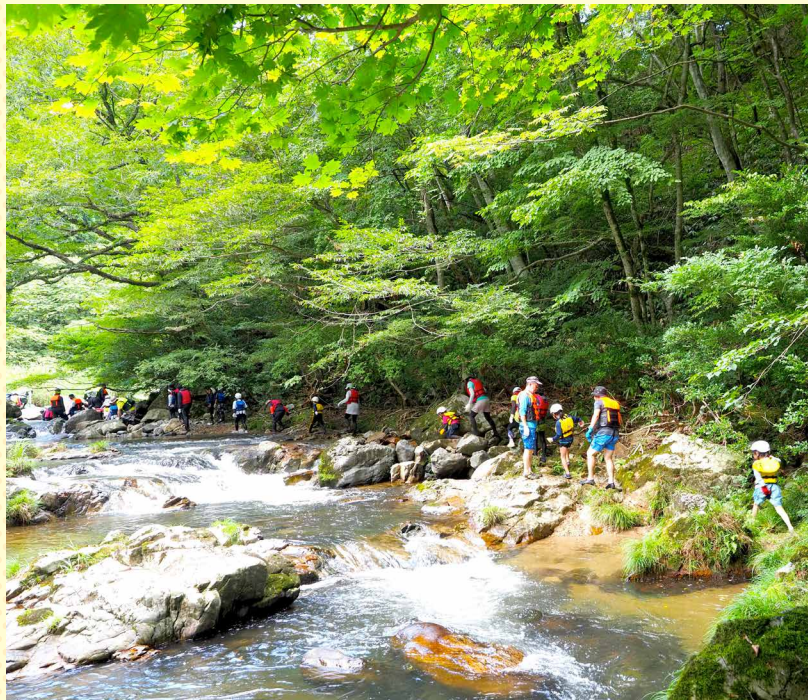


「マサイの人々は環境保全への意識が高い」と山根さんは言う

してきたように感じています。

当団体は、団体設立前の2006年からケニアに長期滞在し、地域住民と共に生活してきました。今や外から来たお客さんではなく「当事者」として地域の野生動物保全活動に取り組んでいます。最初はマサイの人々が本音を話してくれなかったり、私たちのことを信用してくれなかったりすることもありました。今は共に活動する仲間として信頼関係を築けるようになりました。

マサイの人々は「生物多様性」や「環境保全」という言葉は知らなくても、生活の中で日々自然と対峙し、野生動物と共存してきた歴史があります。私たちの役割は、彼らが持つ潜在的な知識や知見を活用し、効果的な取り組みにつなげていくことだと思っています。今後も地域のマサイの人々に寄り添い、彼らの生活様式や文化を尊重しながら、持続的に行える保全活動を一緒に考えて活動していきたいです。



岡山県北部に位置する真庭市は、自然が豊かに残る日本有数のオオサンショウウオの生息地。この地域では、半分に引き裂かれても生きているという言い伝えから、オオサンショウウオは「ハンザキ」と呼ばれ親しまれている



調査で捕獲されたオオサンショウウオ。世界最大の両生類で、体長が1.5m以上になる個体もいる



子どもが参加できるフィールドづくり
保護活動の拠点となるフィールドづくりは5カ所で行い、今後も増やしていく予定。このような環境整備によって、オオサンショウウオだけでなく希少な生き物の観察ポイントとしても活用できるようになった。

生物とふれあえる自然体験学習会
感染症対策を行ったうえで自然体験学習会「真庭清流自然学校」を実施。多くの親子に自然体験を楽しんでもらえた。オオサンショウウオの生息地の美しい景観や豊かな自然が広く知られるきっかけになった。



夜間観察会に多くの親子が参加
オオサンショウウオは夜行性のため調査は夜間に行うことが多い。昨年は多くの人が参加しやすい観察会として開催し、同時に調査も行った。観察会は年間8回開催、200人以上が参加した。

ハンザキサンクチュアリとして本来の生態系を取り戻す
「オオサンショウウオの保護の考え方は二つあります。一つは繁殖用の人工巣穴を作るなど、オオサンショウウオに注目した保護の考え方。もう一つは、周りの生物や植生も含めた大きな生態系として、エリア全体を保全していくという考え方、私たちは地域全体の生態系の保全を進めています」と徳永さんは言います。良好な自然環境が残る河川域およびその背後地となる森林域を生態系保全区（サンクチュアリ）として位置づけ、そこで自然観察会などの活動を行うことで、保護活動を広くアピールすることができそうです。徳永さんは「繁殖に適した自然環境の残る河川をハンザキサンクチュアリ（オオサンショウウオ重点保護区域）に指定して、それぞれの場所に合った環境保全計画を策定し、川に本来の生態系を取り戻す活動を進めていく予定です。この活動によりオオサンショウウオの暮らす川を蘇らせ、清流の環境をつなぐ『水と緑の回廊』を再生するとともに、多くの人にオオサンショウウオに会いにきてもらうことができばうれしいです」と今後の展望について語りました。

晴れの国野生生物研究会は、中国地方における野生生物の調査研究を目的として発足し、現在はオオサンショウウオの生息状況や環境の調査・保護に取り組むとともに、生き物と人と自然が共生する魅力的な地域づくりを進めています。「オオサンショウウオの調査や保護は、団体発足当時から取り組んでいます。活動の中心となる岡山県真庭市北部地域は、特別天然記念物の生息地として指定されている日本有数の地域ですが、近年の度重なる豪雨被害で個体が下流に流され、元の生息地に戻れず繁殖ができないという問題が発生。また、河川改修によって繁殖地となる溪流も減少してい

人と川がふれあう拠点を
この地域の河川は昔はオオサンショウウオの営巣地となる自然または石積み護岸でしたが、生活の変化に伴う河川改修でコンクリートブロックの人工護岸に変わり、生息できる環境が減っています。「広大な地域のどこが繁殖域なのかを把握したうえで、そこに拠点となるフィールドを整備しています。河畔歩道の整備やゴミの撤去を実施し、また徒歩が困難な場所ではゴムボートで移動できるようにロープを設置するなど調査観察ポイントを増やしています。このように人が水辺に近づくやすくなる工夫をすることで、住民や子どもたちも活動に参加できるようになり、このフィールドで多くの人がオオサンショウウオを観察し、保護の

必要性を感じてもらおうことが理想です」と徳永巧さんは話します。整備されたフィールドでは、主に子どもたちを対象とした自然体験学習会を開催しています。「学習会の目的は、里山の自然環境を体感して、清流を中心とした生態系の保全の必要性を理解してもらおうことですが、まずは楽しく参加できることが大切です。そのため、専門家の調査のような難しいものではなく、川遊びや探検、生き物の観察など、子どもたちが川とふれあう機会になるような活動メニューを考えています。参加して興味を持った人の口コミにより、さらに多くの人が参加するようになっていきます」と話します。

必要性を感じてもらおうことが理想です」と徳永巧さんは話します。整備されたフィールドでは、主に子どもたちを対象とした自然体験学習会を開催しています。「学習会の目的は、里山の自然環境を体感して、清流を中心とした生態系の保全の必要性を理解してもらおうことですが、まずは楽しく参加できることが大切です。そのため、専門家の調査のような難しいものではなく、川遊びや探検、生き物の観察など、子どもたちが川とふれあう機会になるような活動メニューを考えています。参加して興味を持った人の口コミにより、さらに多くの人が参加するようになっていきます」と話します。

オオサンショウウオの保護で、地域の生態系全体を維持していく
オオサンショウウオは「生きた化石」とも呼ばれ、国の特別天然記念物に指定されています。しかし生息地の環境変化によりその数を減らし、今や絶滅が危惧されています。日本有数の生息地である岡山県北部で、オオサンショウウオをはじめとした地域全体の生態系の保全に取り組んでいる「晴れの国野生生物研究会」。同団体の環境保全活動と、人と川がふれあう自然体験のフィールドづくりに注目しました。

晴れの国野生生物研究会

活動名 オオサンショウウオの暮らす清流を守ろう！
自然体験のフィールドづくりからはじめる
水と緑の回廊の再生



鳥取県東伯郡 <http://www.fine-country.com>



・お話を伺った人・
副会長
谷口真一さん(左)
徳永 巧さん(右)



株式会社フレーベル館

フレーベル館

本社所在地 東京都文京区

URL <https://www.froebel-kan.co.jp/>

1907年の創業以来、児童図書の出版や保育用品の製造・販売を通じて、子どもたちの健やかな育ちを支えてきたフレーベル館。同社は2020年にSDGsの取り組みの一環として「本でこどもの未来を守るキャンペーン」を行いました。今回はこのキャンペーンを実施した背景や地球環境保全に対する思いについて伺いました。

よりよい地球環境を
子どもたちに残すために

誰もが知っている「アンパンマン」シリーズや「ウォーリーをさがせ!」シリーズなどの児童図書の出版や、保育施設向けの遊具や教材の販売をしているフレーベル館。それ以外にも子ども向け室内遊び場や子育て支援サイトの運営など、同社の企業理念である「子どもたちの健やかな育ちを支える」に基づく事業を幅広く展開しています。子どもたちや、子どもたちを取り巻く環境を大切にする思いからスタートした「本でこどもの未来を守るキャンペーン」について、同社取締役メディア事業部長の中野正之さんは次のように話します。

「このキャンペーンは、2020年1月から12月までの1年間、全国の書店で販売された当社の書籍の売り上げの一部を地球環境保全のために地球環境基金に寄付するというものです。当社は紙の書籍を出版、販売する事業を行っていますので、地球環境保全への取り組みは欠かせません。さらに読者である子どもたちに、よりよい地球環境を残していきたいという強い思いもあり、社業を通じて貢献できることを探し、SDGsの達成に向けた取り組み

みの一環として企画しました」

しかし、2020年2月頃から、新型コロナウイルス感染症が広がり始めます。「キャンペーンをスタートして間もなく、感染の拡大と時期が重なってしまいました。外出自粛等の影響により、書店で書籍を手にする機会が減ってしまったため、この取り組みを広くみなさんに知っていただくことは簡単ではありませんでした。しかし、キャンペーンに賛同される多くの声や、地球環境と子どもたちの未来を守りたいという強い思いが、キャンペーンを押し進める力となってくれました」と中野さんは当時を語ります。



「プロから学ぶ修理ずかん」シリーズは、子どもにもできる、プロに聞いた修理方法を紹介。物を大切に使うという気持ちが養える

小さなころから子どもたちに
環境に関心を持ってもらう

また、同社では書籍を通じて、子どもたちの環境に対する関心を高める取り組みも行っています。「中でも『プロから学ぶ修理ずかん』シリーズという学校の図書館向けの本が好評です。物が壊れたらすぐに捨てて、新しい物を購入すると、地球環境に負荷がかかるということを知らずとも、壊れても修理したり、リサイクルしたりすることの大切さを学ぶための本です。書籍を通じて子どもたちにもSDGsの目標の一つである『つくる責任つかう責任』という考え方が浸透していくことは大変うれしいです。未来を担う子どもたちが、小さなころから環境に関心を持つことは、これからの地球環境保全に重要なことだと思います」と中野さんは話し、今回のようなキャンペーンや書籍による取り組みにより、未就学児や小学生の環境への意識がより一層高まることにも期待されていました。

SDGsの推進に
業界が手を合わせて

今回のキャンペーンの他にも、フレーベル館では環境保全につながるさまざまな

「本でこどもの未来を守る
キャンペーン」とは

フレーベル館が2020年1月から12月までの1年間に、書店で販売した同社発行の全書籍売り上げの一部を、地球環境保全のために地球環境基金に寄付。寄付金は地球環境基金を通して、環境保全活動を行う民間団体への助成・振興事業のために役立てられる

「子どもたちの健やかな育ちを支える」という理念を大切に
地球環境と子どもたちの未来を守る活動を続けていきたい

まな取り組みを行っています。その取り組みについて広報チームリーダーの安藤恵理子さんに伺いました。

「まず、物流においては、本の配送などで排出されるCO₂を削減するために、同業他社と協力し、物流を一本化して効率化を図ることで削減の効果を上げる『共同配送』を、一部の商品群で始めています。また、出版事業においては、資源である紙の使用をいかに削減するかが課題です。その対策の一つとして、書籍の電子化を進めています。さらに本だけでなく、教材や遊具の開発に関しても、環境に配慮した素材の使用を進めています。新たな取り組みとしては、首都圏に展開している子どもの室内遊び場（キンダープラッツ）があります。これは地域の子育て支援の場として利用していただくことを想定していて、SDGsの目標の一つ『住み続けられるまちづくりを』につながる取り組みとして進めています。書籍の電子化について中野さんは、「当社は環境保全の観点から、作家さんと相談しながら積極的に取り組んでい



「キンダープラッツ」は、絵本の森をイメージした室内空間で、親子一緒に遊びを楽しめる



お話を伺った方：株式会社フレーベル館 取締役
メディア事業部長 中野正之さん

コロナ禍という厳しい状況ではありますが、子どもたちの未来を守る活動に積極的に取り組みたいと、中野さんは言います。「子どもたちによりよい地球環境を残し、持続可能な世界を実現するために、SDGsの推進に取り組むことは喫緊の課題です。そしてSDGsの達成に向けては、世界中の人たちが協力して持続的に行動することが大切です。今、出版業界においても地球環境保全への機運が高まってきており、業界全体で手を取り合って一緒に取り組んでいくために、率先して声がけをしていきたいと思っています」

第6回 全国ユース環境活動発表大会全国大会 開催報告

日本全国のユース世代による自主的な環境活動の継続、発展とネットワークの拡大を目的とした「全国ユース環境活動発表大会」。8つの地方大会から選出された16団体がWeb上で動画を発表し、審査が行われました。新型コロナウイルスの影響で環境活動、SDG s活動が制限される中でも創意工夫をして取り組む高校生の熱意あふれる大会となりました。



概要 日程 令和3年1月22日(金)～29日(金)
(発表動画Web閲覧期間)
主催 全国ユース環境活動発表大会 実行委員会
(環境省・独立行政法人環境再生保全機構・
国連大学サステイナビリティ高等研究所)
後援 読売新聞社
協力 環境省地方環境パートナーシップオフィス(EPO)／地球環境
パートナーシッププラザ(GEOC)／ESD活動支援センター
協賛 キリンホールディングス株式会社／協栄産業株式会社／
SGホールディングス株式会社／株式会社タニタ



環境大臣賞

宮城県農業高等学校
科学部チーム smiles

サクラの新品種開発で桜の緑被率を上げる
～被災農業高校が立ち向かう震災10年目の挑戦！～



東日本大震災の津波跡の校庭に残った桜を用い、増殖と植栽を繰り返して間もなく千本となる。品種開発も行い「玉夢桜(タムメザクラ)」と命名。新品種の認定を受けた。現在は台風の被災地などで桜の植栽法を紹介しながら、CO₂吸収促進を提言している。

読売新聞社賞

愛媛県立長浜高等学校
水族館部

日本初の高校内水族館
「長高水族館」プロジェクト

今年で22年目を迎える「長高水族館」では、水族館部の生徒が展示水槽の解説やショーなどのイベントを通して、来館者に生き物のすばらしさを伝えている。

優秀賞

北海道標高高等学校
地域環境系
環境ゼミガイド班
学ぼう自然、守ろう環境
私たちが発信する
自然再生意義

京都府立北稜高等学校
環境委員会
地域を結ぶ環境委員会の
取組 ～KESを基盤とした
環境保護活動～

北海道美幌高等学校
環境改善班
オホーツクの自然を守れ！
PART3 オホーツクで実践
した水と生き物を守る活動

広島県立世羅高等学校
アロマプロジェクト
ネズミサシを用いたアロマ
オイルで里山保全を
未利用資源の新たな利用
価値を見つけよう

東京都立富士高等学校
学生団体えこま
“えこま”を創る！

広島県立祇園北高等学校
科学研究部
太田川におけるプラスチック
ごみの輸送過程と、効率的
な回収についての研究

東京都立府中東高等学校
生物部
室内における養殖技術の
確立

香川県立多度津高等学校
建築科&写真部
地域とともに歩む環境活動
～今年度も継続！地球の
未来を考えた取り組み～

大阪府立豊中高等学校
地産分枝
地域魅力化クラブ
高校生の提案で地域電力
会社設立！～エネルギーを
変える。まちが変わる。～

福岡県立伝習館高等学校
自然科学部
絶滅危惧種ニホンウナギの
水槽から生命に支えられた
持続可能な社会を展望する



国連大学サステイナビリティ 高等研究所 所長賞

富山県立滑川高等学校
海洋クラブ

持続可能な社会を目指した
未利用資源イワシの活用



全国的に安値でしか売れないイワシにスポットライトを当てたいと思い、缶詰として商品化。残渣は段ボールコンポストにして肥料にし、植林活動で山に撒いた。山が豊かになることで海が豊かになり、魚がとり続けられる持続可能な漁業を目指した。

先生が選ぶ特別賞

長野県長野高等学校・長野日本大学高等学校
学生団体「Gomitomo」

海無し県長野からプラゴミを無くす！
「清走中～Run for trash～」

ゴミ拾いは楽しい！ ゴミ拾いにゲーム要素を組み合わせた老若男女が参加できるイベント「清走中～Run for trash～」を長野市で開催。



地球環境基金のサポーター

地球環境基金をご支援くださった方々

地球環境基金に、2021年1月から6月末までにご寄付・ご支援くださった方々は下記のリストのとおりです。個人や企業・団体としてご協力いただいた方はもちろん、さまざまなイベントを通じて募金活動にご参加・ご協力いただいた大勢の方々に深く御礼申し上げます。

2021年1月から6月末日現在までに668件、総額**19,045,777円**のご支援をいただきました。ありがとうございました。

個人	企業	国・地方公共団体
青木 和彦 青木 大地 赤崎 弘幸 阿川 優太 秋元 良一 芦田 幸子 安藤 靖代 飯田 浩二 五十嵐 真由美 池田 朝雄 石川 倫 伊藤 文子 井上 雅晴 今田 圭孝 井本 敦幸 植松 太郎 大木 恒和 大林 祐貴 大山 真理子 岡本 昇 加来 陽子 加藤 信幸 門畑 裕美子 喜田 晴世 吉川 秀二 窪原 麻希 小林 大 小林 由紀 駒田 義和 酒井 航介 崎山 泰樹 笹生 真悟	佐野 郁夫 篠原 泰 清水 慎吾 志村 和男 城田 義隆 杉本 敦也 鈴木 つとむ 角 敬太 大宝院 良子 高橋 多佳子 田坂 英樹 谷山 正恵 土田 由美子 長洲 智子 中原 宏 永見 泰宏 中村 隆子 二関 文男 野田 将子 橋本 雄次 波照間 清秀 土生 亜紀子 日向 俊幸 日吉 勇人 平岡 大作 平野 英子 藤田 周一 細谷 京子 前田 綾香 前田 美知恵 松崎 若草 松本 春美	宮澤 進一 村石 健 村上 基 山崎 俊太郎 吉田 龍貴 吉田 実 和木 宏 脇若 保雄 渡部 智寛 浅香工業株式会社 株式会社朝日フィナンシャルグループ 有限会社アメニティ・ライフ・エイド イーパートナーズ株式会社 奥野製菓工業株式会社 東京支店 オリンパス株式会社 株式会社グラン・ラフィネ はるな薬局 恵我之荘店 株式会社グラン・ラフィネ はるな薬局 宝塚店 株式会社グラン・ラフィネ はるな薬局 豊津店 株式会社グラン・ラフィネ はるな薬局 なごみ店 株式会社グラン・ラフィネ はるな薬局 宮の前店 JNC株式会社 株式会社ジャパンクリエイト 株式会社そごう・西武 株式会社橋フォーサイトグループ 株式会社チャオニーノ 績特許事務所 株式会社ディー・エヌ・エー 東北銘醸株式会社 日本紙通商株式会社 ファミリーマート八王子甲州街道店 ブックオフコーポレーション株式会社 株式会社フレーベル館 ポケットカード株式会社 三菱UFJニコス株式会社 株式会社宮崎銀行 株式会社宗平
		阿賀野市 京ヶ瀬支所 市民生活課 大牟田市役所 近畿地方環境事務所 久慈市 白鷹町役場 町民課 津市役所 環境部環境政策課 富沢市民センター 紀美野町役場 浜松市役所 引佐協働センター 富士市役所 三重県庁 環境生活部環境生活総務課 南大隅町役場 町民保健課環境衛生係
		その他 社会福祉法人いいのやま福祉会 野の花 久留米市立久留米特別支援学校 一般社団法人全国燃料協会 学校法人 玉川学園 道の駅 雷電くるみの里 山形美術館募金箱
		企業協働プロジェクト 一般社団法人 日本釣用品工業会 (五十音順・敬称略)

※このリストは、地球環境基金への振込通知書等に記載された名称・氏名に基づき作成しておりますので、個人および企業・団体等の区別につきまして必ずしも正確ではない場合があります。また、紙面の都合により、ご寄付・ご支援くださったすべての方々のお名前を掲載できない場合もございますので、ご了承ください。

■ ご寄付口座のご案内

「地球環境基金」へのご寄付は、下記口座より受け付けております。同一金融機関でのお振込みについては、取扱窓口でお申し出ください。お振込みの手料は無料になります。

銀行名／支店名	口座番号	口座名称
ゆうちょ銀行	00190-664214	地球環境基金
新生銀行／本店	普通預金 0789699	独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金
三井住友銀行／東京公務部	普通預金 3013615	
三菱UFJ銀行／本店	普通預金 7637448	
みずほ銀行／本店	普通預金 2413416	
りそな銀行／赤坂支店	普通預金 1023850	

①独立行政法人環境再生保全機構は、特定公益増進法人に指定されており、税制上の優遇措置を受けることができます。
②ゆうちょ銀行以外の銀行からお振込みいただく場合は、領収書が発行できません。領収書の発行を希望される方は、お手数ですが、地球環境基金部 基金管理課(TEL:044-520-9606)へご連絡ください。
■この他にも、クレジットカードを利用したご寄付など、多様な寄付方法をご用意しています。詳しくはWebサイトをご覧ください。
地球環境基金のホームページ <https://www.erca.go.jp/jfge/>

■ 読者アンケートにご協力ください。

読者の皆さまの声を聞かせください。いただいたご意見等は制作の参考とさせていただきます。アンケートは、このページのアンケートはがき、またはWEBより受け付けております。ご協力をお願いいたします。

PRESENT

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で、10名様に地球環境基金オリジナル・エコボトル、3名様にイルカさんのサイン色紙をプレゼント(応募締め切り2022年2月末)。当選者の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

